

主日の福音 2025/3/23(No.1345)

四旬節第 3 主日 (ルカ 13:1-9)

「それでもだめなら」と言える覚悟はあるか



大司教様は今年の誕生日前日に、大きなプレゼントを神様から頂きました。それは洪神父様です。大司教様だけでなく、長崎教区全体が、大きなプレゼントを頂きました。言葉では言い表せない喜びです。

ただ、大司教様ほどの立場になると、良いことばかりではありません。今週「実のならないいちじくの木」のたとえでしたが、「もう三年もの間、このいちじくの木に実を探しに来ているのに、見つけたためしがない。だから切り倒せ。なぜ、土地をふさがせておくのか。」(13・7)と、はっきりとした結果を求めなければならないことも出てきます。

ぶどう園の主人が父なる神で、園丁がイエス様だとしたら、「御主人様、今年もこのままにしておいてください。木の周りを掘って、肥やしをやってみます。そうすれば、来年は実がなるかもしれません。もしそれでもだめなら、切り倒してください。」(13・8-9) そう言って切り倒されるのはイエス・キリスト自身なのかも知れません。

父なる神が、御子イエス・キリストを切り倒せるはずがありません。しかし、イエスが十字架にかけられたことを考えると、切り倒せるはずがなくても、切り倒すことが求められ、それを実行します。大司教様が、誰よりも父なる神とイエス・キリストに倣って生きるお方であるなら、切り倒せるはずのない相手を、実際には切り倒さなければならない。そういう過酷な立場におられるのではないのでしょうか。

今回中田神父は、個人的に「洪助祭が司祭になったら、福江の助任にください」とお願いしました。協力者が完全に新しい司祭になると、一から人間関係を築いていかなければならず、私は負担が大きいと思ったからです。ただ、お願いする側は自分の希望だけ言っておけば良いのですが、大司教様は福江のことばかりを考えてはいられません。

大司教様がぶどう園の主人であるなら、私たち司祭は園丁なのですから、「もしそれでもだめなら、切り倒してください」これが言える人でなければなりません。私の願いがふさわしくなければ、切り倒してください。あるいは私自身を切り倒してください。その覚悟は必要です。

そこまでの覚悟を持たなければ、大司教様だけに辛い決断をさせることになります。私は今回、その覚悟を持っていたらどうか。「今年も彼を育てる努力をしますから、このままにしておいてください」と、願うことだけが頭にあったのではないか。反省が残ります。

ぶどう園の主人は、実を付けるまでどこまでも辛抱しますが、一方ではたとえご自分の独り子でさえも、切り倒す決断もおできになる方です。ただ、切り倒す方にだけ残酷な思いをさせてはいけない。主人を信頼した上で、「ためらわずに切り倒してください」と園丁である司祭たちが覚悟を見せることで、大司教様は本当の意味で仕事ができるのだと思います。

すべての長崎教区司祭が、中村大司教様に、「もしそれでもだめなら、切り倒してください」と言える司祭でありたいものです。

四旬節第 4 主日 (ルカ 15:1-3,11-32)

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。